

文化言語地理学者としての諏訪哲郎先生 ——東アジア東部文化の重層——

安部 清哉*
ABE Seiya

1 文化言語地理学者としての諏訪哲郎先生

日本における文化地理学（人文地理学）の中で、言語の問題も扱う研究者となると、必ずしも多くはない。代表的研究者を挙げるなら、言語学が専門である橋本萬太郎氏、気候学が専門の鈴木秀夫氏、そして、地理学専攻で環境学がご専門であり、現在は環境教育学の諏訪哲郎先生である。

諏訪哲郎先生の文化・言語地理学方面の代表的研究には、次のようなものなどがある。

- 『西南中国納西族の農耕民性と牧畜民性』1988年、学習院大学
- 「東アジア基層文化圏を分断した二つの波—漢民族成立・発展過程試論」『漢民族を取り巻く世界』（学習院大学東洋文化研究所調査研究報告25、1988.
- 「言語からみた東アジアの民族移動」『文明と環境5文明の危機—民族移動の世紀』1996年、朝倉書店
- 「長江文明と言語類型地理論」『橋本萬太郎記念中國語學論集』1997、内山書店
- 「中学校社会科教育への近年の遺伝子解析研究成果導入の可能性」『学習院大学教育学科 教育学・教育実践論叢』1、2014.
- 「言葉・食べ物・DNAの分布から見た東アジア世界」学習院大学人文科学研究所談話会（2019年6月4日、当日の資料）

4番目のものは、上にもあげた高名な言語学者である橋本萬太郎氏の記念論集に掲載されている論文である。橋本博士の論集への掲載ということからもうかがえるように、言語地理学、中国文化地理学の研究者として、諏訪哲郎先生が、高い評価を受けていることがわかる。

上記の中でも、最初の『西南中国納西族の農耕民性と牧畜民性』は、中国の少数民族の文化・言語にも深く関わるというだけでなく、中国の東西南北の言語・文化の地理的史的变化、さらに東アジアの文化地理学を論じて高い評価を受けているご研究であり、諏訪氏の代表的研究の1つである。

本稿執筆者（安部）も、今から30年程前にこの書に接し、非常に強い刺激を受け、研究上の影響を受けた者の一人である。諏訪先生は、昨年も学習院大学人文科学研究所主催の談話会（2019年6月4日）にて、「言葉・食べ物・DNAの分布から見た東アジア世界」という演題にて、たいへん興味深いたくさんの分布地図と共に先生の新説をご紹介された。ここでは、そのようなご研究の中から、先生の興味深い文化地理学の学説のいくつかを紹介してみたい。

2 諏訪哲郎先生の言語文化地理学の解釈地図——諏訪哲郎（1988）より

上記の『西南中国納西族の農耕民性と牧畜民性』の中には、中国の言語分布地図、東ア

* 学習院大学文学部日本語日本文学科

【図1】東アジア諸言語における「火」の分布（諏訪哲郎先生（1988）より）

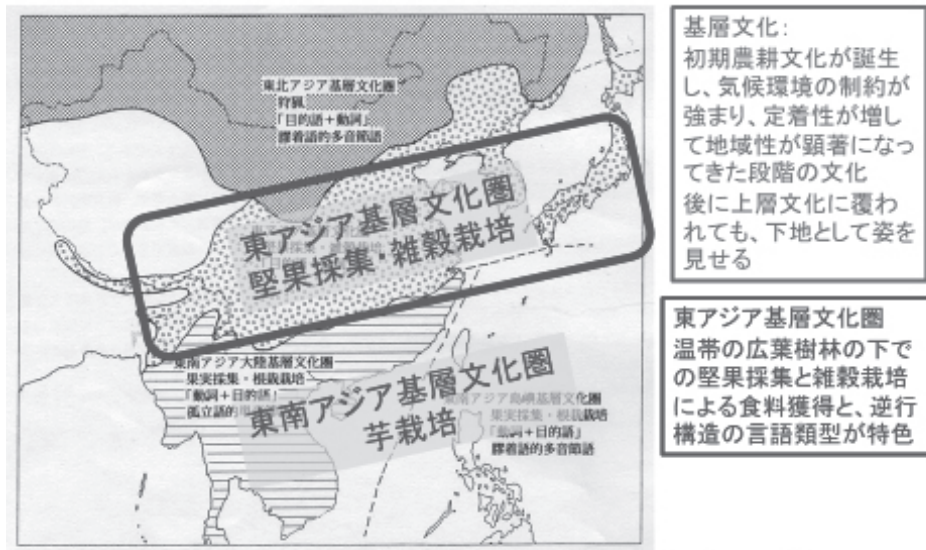


図6-10 東アジア諸言語における「火」の分布

【図2】東アジア基層文化圏（諏訪哲郎（2019）資料より）

B- II 二本の境界線の間はどんなところ？

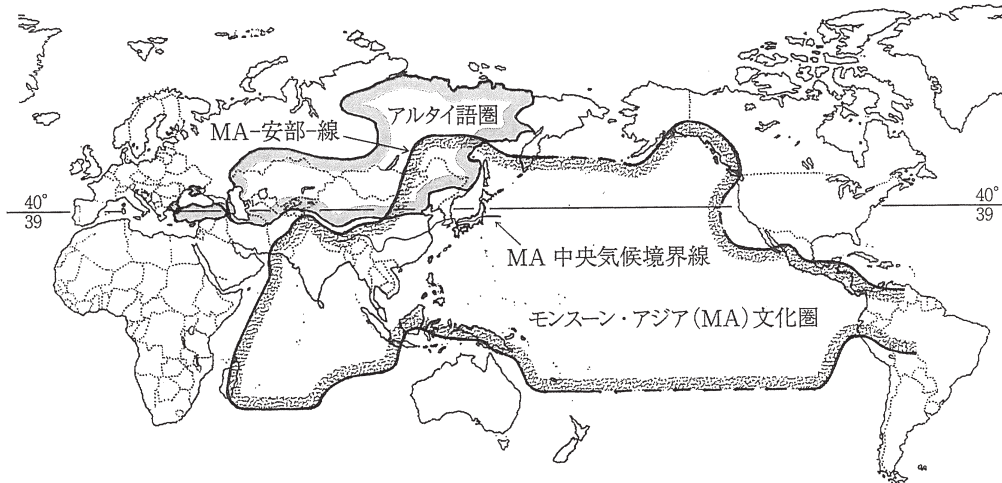
B- II -① 東アジア基層文化圏



原図は諏訪哲郎(1988)「東アジア基層文化圏を分断した二つの波」

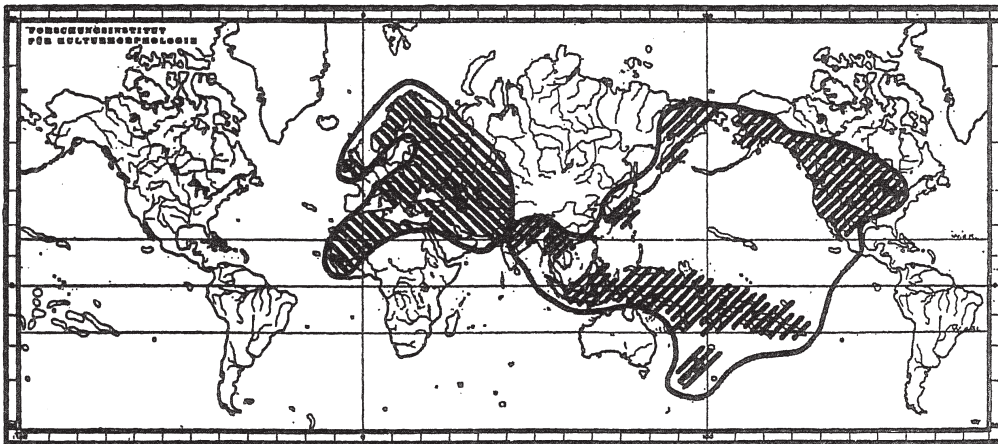
アジアの言語文化地理の解釈図が幾図も掲載されている。例えば、図1は、「東アジア諸言語における言語地図」として27枚掲載されているうちの1枚で、「火」の意味の諸言語・諸方言での語形分布地図である。当時、日本の研究者が描く言語地図は、周囲の方言も含め代表的語形を大雑把な領域としてまとめて描く程度のもので普通であった。このように東アジアの広域にわたり、しかも個々の語形を発音記号（IPA）で、これだけ細かく分布地図化したものは、寡聞にして知らない。今、中国国内の詳細な言語・方言地図がようやく作成されるようになり、また、世界地図でももう少し荒い言語地図が刊行されている程度である。当時としては画期的なものであった。言語分布図だけでなく、図2のような文

【図3】 モンスーン・アジア (M.A.) の領域 (安部2003.7) とアルタイ諸圏 (安部 (2008))



モンスーン・アジア(MA)の領域(安部 2003. 7)
(アルタイ語圏と重複する領域に注意)

【図4】 神話の類型的分布における東洋型と西洋型 (Frobenius 1938) (安部 (2008))



(第20図) 西洋の焼いた鉄(Polyphemtod) ▨, 東洋の焼いた石(Glutsteintod) ▩の神話分布

化圏地図もお示しになっている。

安部は、それらの言語地図と解釈に強い刺激を受けた。後日、自分なりのアジアの言語分布地図、文化地理学的解釈図を論文として発表し、また、SIDG国際方言学地理言語学会 (The International Society for Dialectology and Geolinguistics.) でも口頭発表することにつながった。

また、諏訪先生の【図2】のような文化圏の重なりとその変遷から地域の変化を考察する発想も、無意識のうちに影響したようである。【図3】のような「モンスーン・アジア」(M.A.) という言語文化圏の仮説を提示した際に、M.A.とアルタイ言語圏とが重複する領域をあえて明示し、後者の北方言語文化圏の南下範囲 (【図3】中で重なる領域) とその南限による分布境界線を記載している。因みに、このM.A.の領域は、【図4】に示したように、フロベニウスの神話研究における東洋型の類型領域と重なっており、言語的には名詞型類別詞の分布範囲でもある (安部 (2013) 参照)。諏訪先生の文化地図は、中国の領域すら越えており、それ以前の研究が、中国語と中国国内の少数民族を加えた程度であったものとは大きく異なっていた。その刺激を受けたわけである。

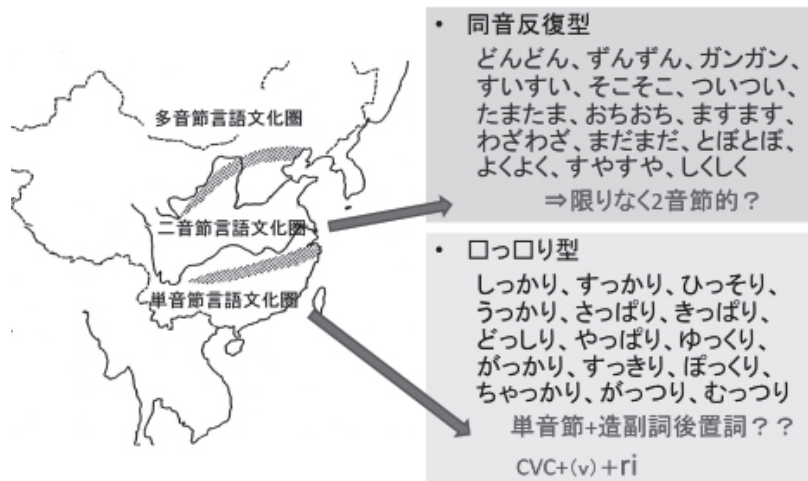
ところで、この【図3】では、東アジアの東側には、2つの文化境界線があることにな

【図5】「言語境界線の北への移動（仮説）」 諏訪哲郎（2019）より



【図6】「日本語副詞の2大(?)類型の由来」 諏訪哲郎（2019）談話会資料より

③ 日本語副詞の2大(?)類型の由来???

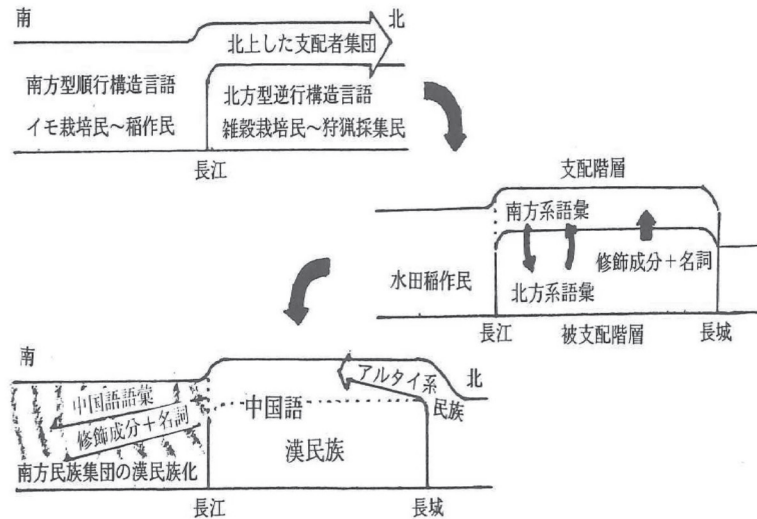


る。1つは、北側にあるもので、M.A.領域に食い込んだ「アルタイ語圏」の南限境界線である。もう1つは、中国中央部に横たわる著名な言語文化境界線、いわゆる有名な「秦嶺（山脈）－淮河－境界線」である（【図8】の拡大図も参照）。（【図3】中では「M.A.中央気候境界線」とある位置に相当し、そこには文化的特徴の南北境界線が重なっている（安部2013）。）この2つの自説の文化境界線をあえてここに提示してみた理由は、次節にあげる諏訪先生の解釈と関わってくるからである。

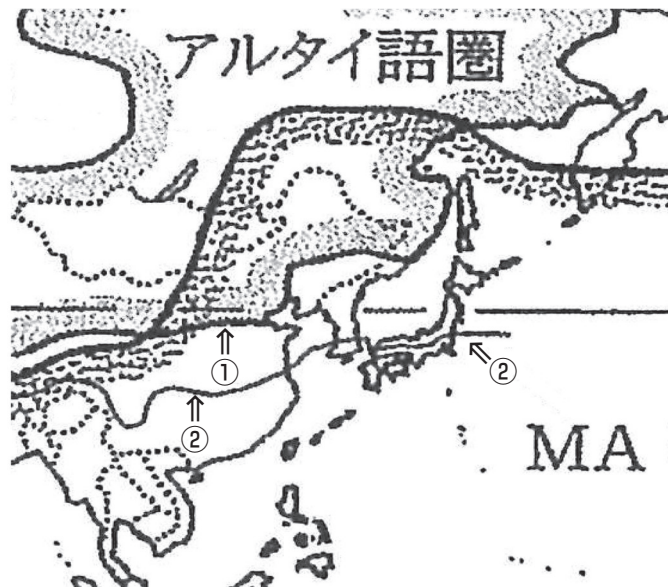
3 「言葉・食べ物・DNAの分布から見た東アジア世界」 諏訪哲郎（2019）

諏訪先生は、先に記した談話会「言葉・食べ物・DNAの分布から見た東アジア世界」でも刺激的な自説を多くご紹介されている。例えば、【図5】「言語境界線の北への移動（仮説）」は2つの言語境界線に対する上層文化の南下に関する自説の発展案（諏訪（2014）も参照）、【図6】「日本語副詞の2大(?)類型の由来」は副詞の南北相違の新説である。

【図7】 中国における南方型言語と北方型言語の接触と変容 諏訪哲郎 (1997)



【図8】 2本の言語境界線 (図4の拡大図) (安部 (2008))



言語学的に目を引くのは、【図6】に示した「日本語副詞の2大(?)類型の由来」であり、下記のように解釈なさっている。

- 「どんどん、ガンガンタイプの副詞は中国に設定できる2音節文化圏の延長上とみなせるのではないか、一方すっかり、がっつりタイプは単音節に造副詞後置詞riがくっついたもので、単音節言語集団がかつて日本にたどり着いた痕跡が、このタイプの副詞に残っているのではないか」(諏訪 (2019) 資料より)

まだ仮説ということで、キャプションに「?」を3つも付けているそうであるが、今後の検証が楽しみである。

ところで、【図6】には2本の文化境界線(グレーの横帯線)が記載されている。【図5】「言語境界線の北への移動(仮説)」にも示されているように、この2本の境界線に挟まれた南—中—北の基層的文化圏各々が、重層した時に相互の文化圏の影響を受けるという変遷を経ることによって、特に南側の境界線が薄れたという解釈を提示された(【図7】参照)。

特に2本の言語文化境界線を提示された点は注目される。なぜなら、南北の2本の言語文化境界線を設定する方が、変遷がうまく説明できるからであり、また、安部の説でもほぼ同じ位置に2本提示していたからである（【図3】参照、安部（2008））。

いま【図8】に【図3】の拡大図を提示する。北が①アルタイ語圏の南限境界線（薄いグレー帯の南側実線）、南がいわゆる②「秦嶺－淮河線」でありMAの気候の境界線でもある。②は【図8】中の[MA]の文字の上の矢印の先に横たわっている細い線で、日本語方言、朝鮮語方言にもそれに質的に相当する連続した方言境界線がある（安部（2008）ほか参照）。中国語と中国文化は、長期にわたり、南側の言語・文化の（北上の）影響、および、北方のアルタイ語や遊牧狩猟民族文化の南下の影響、そして、さらに、その影響を受け続けてより北方的になった中国北側の言語文化の南下の影響とを受け続けてきたことになる、と諏訪先生は解釈されている（【図7】参照）。東アジア東部の文化複層性が大きなスケールでとらえられている様はとても魅力的である。

4 日本語の「こちらが（領収書に）なります。」文——諏訪哲郎（2019）

そのような諏訪氏のご研究の中で、最近の日本語における変化（「これは～です」⇒「これは～になります。」文）に対して、興味深い仮説が提示された。上記の談話会（2019年6月4日）にて、その資料に「蛇足」と謙辞を添えてつつ最後に紹介されている次のような部分である。

○<<蛇足>>体言型形容詞の本質 諏訪哲郎（2019）談話会資料

（*以下、原資料の赤字部分に下線を付す）

【体言型形容詞文化圏】

Be 動詞の発明・定着 ⇒ 体言型形容詞の誕生

原初形 I, Toro. I, boy. I, young.

↓

発展形 I am Toro. I am a boy. I am young.

【用言型形容詞文化圏】における変化

1. be 動詞模倣

我是日本人。 我是年青的。
私は日本人です。 私は若いです。

2. be 動詞忌避（先祖返り？）

次の停車駅は成増です。

↓

次の停車駅は成増になります。

「こちらが領収書です。」とは言わずに、「こちらが領収書になります。」と、言われるようになって久しい（論文やネットサイト記事では「こちらがコーヒーになります。」の例文が挙げられていることが多いが、これを典型例とするには問題があるので除外する）。その違和感は50歳代以上にはまだ続いているようであるが、大学生など20歳代以下では、もう違和感も少なく定着している。「です」で言うようになった表現が「になります」へ変化する要因、遠因は何か？

諏訪先生は次のように述べて、「～です。」の言い方が浸透してきてしまったこと自体が

【表1】「です」の用法の拡大（表中の左側から右側への変化）（安部（2008））

動詞・形容詞の終止形優位化と「名詞優位型用法」—マス・デス交替との関連

高うござい・マス、	高い・デス。(井上 1998)
行き・マス、	行く・デス。(井上 1998)
書き・マスが、	書く・ん(の)デスが(金澤 2008)
見・マスが、	見る・ん(の)デスけれど(金澤 2008)
晴れ・マショウ、	晴れる・デショウ。(田中 2008)
話し・マセン・でした、	話さない・デシタ。(田中 2008) (話す⇔話さない(否定の基本形ととれる))

【表2】成る・行く・来る系表現の増加（安部）

動詞の形式化	文型	形式動詞化??
なる系	名詞+に+なる	「こちらがお釣りに <u>になります。</u> 」
	お+動詞連用形名詞+なる(待遇表現)	「先生がお話し <u>になります。</u> 」
いく系	名詞(形容動詞語幹)+で+いく	(「お前、今回は契約取って来いよ!」)「今日はガチで <u>いきます。</u> 」
	動詞連用形+に+いく	「後半は、勝ちに <u>いきます。</u> 」
くる系	名詞(形容動詞語幹)+で+来る	(本気で歯向かうと思っていなかった弱い奴が抵抗したので(「コイツ、マジ <u>できたか。</u> 」
	動詞連用形+に+来る	「ここで点を取りに <u>きましたね。</u> 」

「用言型形容詞文化圏」では問題であって、その不自然さを解消するために、本来的「～になります。」型の使用に向かっているものであり、本来的用法への言わば「先祖返り」と言えるものだとする。

- 「より古い類型をとどめているといえる用言型形容詞文化圏で起こったのはbe動詞の模倣ではないかと思われます。中国語の「○○是……的」や、日本語における「わたしは若いです。」のような不自然な表現です。用言型形容詞文化圏においては、be動詞の役割を模倣したため、不自然さが付きまとい、それを避けるためにbe動詞忌避という現象が見られます。「次の停車駅は成増です。」というべきところを、最近の方は、「次の停車駅は成増になります。」というようになっています。」(諏訪哲郎(2019)談話会資料より、下線は引用者)

上に「不自然」だと言う「です」による表現の方は、【表1】に挙げたように、名詞から形容詞へ派生して(昭和に)、さらに動詞にも今後は及ぶのではないかと予想する研究者もいるほどに、衰退する気背はまだ見られない。

一方、この「になります。」が「先祖返り」か否かはひとまず置くとして、「なる」の使用という点を見ると、待遇表現における尊敬語・謙譲語の語形の使用に代わって、近世以降での「お～に+なります。」用法の増加がある(「召し上がる」よりも「お食べになる」の類)。待遇表現での「なります」利用であるので、用法上、位相が別であるものの、「なります」語形の使用の増加という点で気になる一致である。

「なります」ではないが、近年における類似する現象として、「行く」「来る」の【表2】

のような言い方の増加も話題にされている。いずれもどこか英語などの欧米的な表現との類似性も感じられる。これらが言語現象として何か関連性があるようにも思われてくるので（「成る」「行く」「来る」の[●]実動詞が意味的に[●]形式動詞化＝状態化？するという文法化現象か）、諏訪先生のような一定の背景を検討する余地があるように思われる。これらは別の現象だとしても、上記の「なります」を他の言語文化現象ともリンクさせて巨視的視点から位置付けようとする説はまだ他に見られず、用言型形容詞文化圏における変化の一環である、とみた諏訪氏の御説に目が吸い寄せられた。活字化されるのは先のことのようなので、新仮説の記録としてここに紹介させていただくことにしたしだいである。

5 諏訪哲郎先生をお送りする

諏訪先生のご論文を紹介しながら、恐縮ながら自説もあげさせていただいたのは、3節で取り上げたように、拙論とも関わって諏訪先生の南北複層説を支持できると考えられたからでもあった。

諏訪哲郎先生は、2020年3月をもって、学習院大学をお引きになられる。学習院大学での奉職は41年間に及ぶという。本学では、文化地理学の授業よりも、おそらくむしろ環境学・環境教育学として教壇に立たれることの方が多かったことと推察する。しかし、いずれの分野にせよ、本学における研究上、教育上の御貢献は、付属の学校も含め長期にわたり本学学院全体に精通していらっしやったことも加わり、極めて大きなものがあった。

諏訪哲郎先生の今後ますますのご健筆とご健勝をここにお祈り申し上げるしだいです。

【引用地図等文献】

- 安部清哉（1997）「古代日本語の動詞重複形（reduplication）二種の語法と方言分布及びその言語類型地理論的問題」加藤正信編『日本語の歴史地理構造』明治書院
- 安部清哉（2008）「アジアの中の日本語方言」『シリーズ方言学1 方言の形成』岩波書店
- 安部清哉（2013）「日本語およびアジア言語における『南北方言境界線』から見たインド・ヨーロッパ語族Centum-Satem」『東洋文化研究』15